

# 乳腺及び胸部外傷

国立がんセンター部長

末 舛 恵 一

## I 乳腺

乳腺も又肺や心臓と共に胸部に位置する単位としての臓器であることは誰がみても明らかなことである。

圧倒される程多数の結核の演題と論文の中に昭和31年第4巻1416頁に初めて、“尿中 17-Ketost-roid よりみた乳腺腫瘍，特に Mastopathie の内分泌学的研究”と題する演題が伊勢田幸彦氏によって提出されている。次いで昭和31年には P<sup>32</sup> による中山式乳癌診断法（千葉大・関野康男氏）同じく昭和32年10回総会には乳房レ線撮影についての演題が医歯大，深見敦夫氏によって発表されている。

昭和36年第14回総会には一般演題として乳癌の術前照射に関するもの（千葉大，柳沢文憲氏）と特別講演として金沢大ト部美代志氏により“乳腺及び縦隔外科の一年の回顧と将来の問題の焦点”が行なわれている。その中では特に，乳腺症の乳癌の母地としての意味の少なからぬこと，乳癌及び乳腺症のホルモン環境の分析から，進行乳癌に対する副腎の摘除，及び脾・副腎静脈吻合という外科的ホルモン療法の実際のべられている。昭和37年第15回総会には一題のみ。（若年者の乳腺腫瘍について北大・奥村信介氏）。昭和38年には3題，昭和40年第18回総会は，藤森正雄座長のもとに3題，昭和41年も又，同座長司会のもと7題，昭和42年も5題の乳腺関係の演題がみられる。マンモグラフィ，触診々断ホルモン依存性，外科的ホルモン療法，外科病理，抗癌剤や放射線と外科療法との併用療法等々，ホルモンレセプターと免疫の問題をのぞいては乳癌の今日的なテーマがすべて，肩をならべている。ますます演題が増加する傾向とみられた。

しかしながら，理解しがたいことには，それ以降，乳腺に関する演題，論文は全くみられなくなった。

乳腺という臓器は，系統解剖学的には，感覚器の中の外皮の中に分類されているのが常であるらしいが，それにしても肺癌や，食道癌，又，縦隔腫瘍と同じく，近隣関係にあり，Oncology の基盤が共通し，又，乳癌は肺，肋膜転移も甚だ高率で，共に切磋琢磨する問題が多い。近く乳腺研究グループの参加，復帰を望みたい。

## II 胸部外傷

社会形態の複雑化と，交通戦争の熾裂化につれて，外傷は，外科学の中で重みをましつつあることはいままでもない。

我が日本胸部外科学会における業績も，又，年々数をまし，内容も又多彩となっている。

昭和37年第15回総会（鈴木千賀志会長）において，胸部外傷がパネルディスカッションとして取り上げられ，本多憲児氏司会のもとに10演題が提示されている。胸部損傷の呼吸力学・札大，幾世総太郎氏，血胸の病態生理一日大，瀬在幸安氏，常盤炭坑における肺損傷一副島労災病院，工藤久雄氏，集計からみた胸部外傷の外科，一九大，滝原哲一氏，胸部外傷の経験一弘大，中山広信氏，阪市大，村川繁雄氏，胸部外傷後にみられた気管狭窄の手術一神大，佐藤陸平氏，外傷性収縮性心

膜炎の治療—熊大，吉永直胤氏，最近5年間の胸部外傷—岩手大，八重樫雄一氏，心臓外傷の手術治療経験—東大，三枝正裕氏，という内容であった。

着実な地歩を占めた胸部外科学の進歩は胸腔内臓器損傷の治療を可能にし安全なものにして行った。

第16回総会昭和38年には10年間の胸部外傷—日医大，片岡一郎氏，ついで第18回昭和40年の総会には，高橋喜久夫会長の招請で Von Georg Rodewald 氏—Hamburg-Eppendorf 大学による“Früh und Spät physiologische Veränderungen nach Brustkorbverletzung”と題する特別講演が行なわれた。第19回（昭和41年）総会には，胸部外傷の実験的研究も発表されている。（阪市大・田口雄一氏）。

昭和43年第21回総会では，交通災害専門病院として設置された神奈川県交通災害センターから，多数例の経験が報告さる， traumatic wet lung もとり上げられている。（前中由己氏）。昭和45年第23回総会では，2題，第24回総会では，要望課題 flail chest に6題の応募があり，同時にニュオリンズ大学 Theodore Drapanas 氏による Shock lung following extensive trauma の特別講演が行なわれている。後者は直接の胸部外傷ではないが，胸部外科医が大きい貢献をなしうる分野といえよう。

昭和48年には26回総会で，白羽弥右衛門座長のもとに“……7年間の肺損傷”（前中由己氏）“重複胸部外傷の検討と遠隔成績”—札大災害外傷部，長尾恒氏等，回顧と反省を伴った経験の発表がみられている。

昭和49年22巻1194頁には“非穿通性外傷に起因した大動脈弁兼心室中隔破裂の一手術治験例”阪大，大橋博和氏の症例報告をみる。又，同22巻806頁には“いわゆる traumatic wet lung の病態生理に関する実験的研究，とくに……”日大遠藤英利氏がみられる。

外傷では，発生原因，病態の解明，迅速で確実な診断と治療については一応の完成をみつつあると考えられる。当面の課題は，外傷発生の現場から救急センターまでの間の能率のよいラインの設定と輸送中の救急医療内容の効率化，適正化にある。

#### 附：自然気胸

純粹な外傷ではないが，肺の derangement ともいえるような自然気胸は年々発生頻度が増加しているように思われる。昭和42年20回総会以来殆んど毎年の如く，総会には，数題の演題がみられる。綜説，原著としても3編がみられる。19巻害59頁“自然気胸の成因と外科療法について”日大，大畑正昭氏，20巻1頁及び6頁に各，“自然気胸の治療”東北大，柴生田豊氏“自然気胸の心肺機能に及ぼす影響”日大新野晃敏氏である。

この他珍しい課題として20巻361頁に“気道熱傷に関する研究”順大，外山紘三氏がある。近頃はやりの雑居ビル火事にはこの種の病態が重要性をましてくる可能性がある。

社会構造，社会活動の複雑化はますます多くのノルマを胸部外科医に強いるにちがいない。

今後のこの方面の研究としては乳癌での早期診断がある。これには集団検診のほか穿刺による細胞診，特に細胞診の発展が望ましい。術後再発癌は化療，ホルモン療法など現在行なわれているが，さらにアドリマイジンによる化療も効果があるものがある。多くの合併療法を開発せねばならない。外傷後は発生する shock lung の病態，治療も今後の研究課題である。